

日本文化人類学会関東地区研究懇談会

特別連続企画

『未知の知をひめた古典』



Radcliffe-Brown



永田脩一

第3回

「今になって、
ラドクリフ＝ブラウンを読む」

発表者：永田脩一

コメンテーター：青柳真智子

小野沢正喜

渡邊日日

2005年1月29日（土） 14：00～16：30

（17：00～懇親会）

聖心女子大学3号館（新棟）3階333番教室

「今になって、ラドクリフ=ブラウンを読む」：発表者・永田修一氏からのメッセージ

「未知の知をひめた古典」連続企画説明の冒頭に、「誰も見出してこなかったラドクリフ=ブラウンの思索とは、今日いかなる読みの博搜をつうじて垣間見えてくる...『ラドクリフ=ブラウン』の姿であり、その著作群であることだろうか」とある。確かに、日本では、「未開社会における構造と機能」(元著初版 1952 年、日本語版: 青柳まちこ訳、東京: 新泉社、1981 年)の解説(蒲生正男著)で指摘されたように、「(「構造と機能」が訳されるまで)彼の著書の一冊も、これまで和訳されていなかった」事情(310 頁)を考えると、今、RB の「著作群」を読み、理解しようとすることは、これまで気づかなかった考え方、解釈の仕方などに出会う伝になるかもしれない。しかし、未読・未知の理由で、RB に取り組むには、余りにも、時機を失している感がせぬでもない。というのも、そして、これまた上記の解説が引用しているように、「レッドフィールドによれば、ボアス以来のアメリカ人類学にはなかった、概念の整備と分析のために定式化したすぐれた手引きを導入したことこそ(ラドクリフ=ブラウンの)最大の貢献であるという」(アメリカでの評価) (蒲生 308 頁)し、「ビーティがいう(ラドクリフ=ブラウンが齎した)人類学の革命は、第三の機能的解釈のことを指している」(イギリスでの評価) (蒲生 309 頁)ということは、今の人類学研究の中に、RB の仕事は、既に、すっかり同化・定着しているので、彼の「未知の知」を探すとしたら、その著作のどこを探せばよいのかと、問わざるを得ない。そこで、私は、今回、一つの課題として、RB が butterfly collecting, conjectural history と呼んだ人類学を離れて、「構造機能主義」といわれる人類学の「理論」を構築し、社会人類学を「理論」科学のレベルに引き上げて、社会学・哲学の論争に参加することを可能にした状況を、自分で読んだ RB の仕事に限って、考えてみることにする。

発表者・永田脩一氏の自己紹介

1931 年生まれ。

1954 年 東京大学理学部人類学科卒業

1958年 東京都立大学大学院社会科学研究所修士課程社会人類学専攻修了。

1959 から 1966 年まで、イリノイ大学大学院で人類学を学ぶ

1967年 アリゾナ州、ホピ族分村の社会変化の研究で、博士号取得（指導教官:Julian Steward）論文:Modern Transformations of Moenkopi Pueblo(University of Illinois Press 1970 年刊)。

1966 年から 1997 年まで、トロント大学人類学科で教鞭をとる。

1970 年から 1973 年まで、マレーシア・ペナンの理科大学で研究と教育。

ペナンに就職経験以来、西セマン族の Kensi の研究をしている。

現在 東京福祉大学教授(社会人類学)

<第3回研究懇談会

「今になって、ラドクリフ=ブラウンを読む」
の御案内>

日時：2005年1月29日（土）

14:00～16:30

会場：聖心女子大学3号館（新棟）3F

333教室

■ 研究懇談会終了後、17:00より、
永田先生を囲んでの懇親会を予定してい
ます。

<第4回目以降の予定

（取り上げる人類学者、発表者 決定分）>

(博論・修論発表会(3月)於：東京都立大学)

■ 第4回(4月頃) ニーダム

発表者：吉岡政徳

コメンテーター：宮崎恒二、小田亮

■ 第5回(6月頃) シュナイダー

発表者：小川正恭

コメンテーター：栗田博之、上杉富之

■ 第6回(10月頃) モーガン

発表者：清水昭俊

コメンテーター：渡辺公三

スチュアート・ヘンリ

<問い合わせ先>

日本文化人類学会関東地区研究懇談会運営委員会
事務局

〒150-8938 東京都渋谷区広尾 4-3-1

聖心女子大学人間関係研究室 葛野浩昭

TEL 03-3407-5743 FAX 03-3407-5833



たとえば、誰もまだ発見していないフロベニウスの思惟、誰も見出して来なかったラドクリフ＝ブラウンの思索とは、今日いかなる読みの博搜をつうじて垣間見えてくる「フロベニウス」や「ラドクリフ＝ブラウン」の姿であり、その著作群であることだろうか。

西暦二〇〇四年のフィールドワーカーとして、人類学の古典と呼ばれるテキストにあらためて真向かうこと。さりとしてここでは、先人の「帝国主義的な」業績の功罪をまたしても現在の高みから、いいかえればポストコロニアルの光学により浮薄に評定する読みなど、むろんわれわれは期待していない。

一九八〇年代以降のモダニティ批判は、なるほど文化人類学／社会人類学の今日にとり避けて通りえぬ里程標のひとつだったかもしれぬ。古典の読みを介した未知の知の発見、未生の思考にむけた跳躍に、ややもすればそれが阻みかねない不自由を、今日の私たちはようやく漠然と気づきはじめているのである。

人文・社会科学系の領域で、学問の古典とそのアクチュアリティとが今日これほどまでにみごとに乖離を来してしまっている分野、それこそ文化人類学なのではなからうか。

古典への接近を今さらながらに呼びかける本企画で問うのは、それゆえ在りし日の学問への懐旧でもなければ、旧説をめぐる硬直した弁明でもない。ましてやリアリズムの行間に隠蔽された「コロニアル」の余白探しや、「民族誌論」の格好の餌食になりうるような事例のあげつらいでもない。

古典は、糾弾によってでも恩情によってでもなく、まさに生きた同時代の書物として再読されねばならない。単なる「過去の書物」と古典とを分かち唯一の指標とは、おそらく後者の非回収性に求められるからだ。知られるように、たとえレヴィ＝ブルュルがエヴァンズ＝プリチャードに、フォーテスがリーチに徹底批判されたとしても、批判された当の著作をひとがなお執拗に古典と呼びつづけるのは、型どおりの批判によってはそれらを忘却し抹殺しきれぬ知、既存の知では回収不能な未知の知の存在を、ひとが少なからぬ不安や畏れとともに直観しているからである。

人類学的古典の数々にひそむ尋常ならざるフィールド・データの厚みや、おなじく尋常ならざる感性と思考の広がり、原典を素通りした教科書的批判や、原点批判者の批判の受け売りではけっして感知されうるものではない。

かかる趣旨のもと、本企画では、人類学的古典とその著者の学問的営為に長年にわたり対峙し、当の古典にみなぎる思考の全容を知悉する点にかけては余人をもって代えがたい方々に毎回ご報告をいただき、各古典の生産者が尋常ならざるフィールドワーカーとして、あるいは尋常ならざる思惟の達人として、今日の私たちに問いかけずにはいない「未知の知」のありようを探っていくことにしたい。

「古典に還れ」と抹香臭く叫ぶのではなく、ともに「古典に突き進もう」ではないか。

企画: 日本文化人類学会関東地区研究懇談会運営委員会

渡邊欣雄・大杉高司・葛野浩昭・真島一郎